

# 存在文 — there 構文と be 構文と have 構文—

On Existential Sentences:  
*There* Construction, *Be* Construction, and *Have* Construction

松 井 千 枝  
MATSUI Chie

This article discusses characteristics of existential sentences expressed by *there* construction, *be* construction or *have* construction, and finds some similar or different syntactic and semantic features among them. The British National Corpus was used as their primary source of data. As a result, the structures they have are reflected in their syntactic and semantic characteristics. Furthermore, the properties of each of the constructions may stand out clearly by observing in which situations they appear pragmatically.

## 1. はじめに

一般に存在を表すのに (1a、2a、3a) の *there* 構文、(1b、2b、3b) の *copula be* 構文 (以下 *be* 構文)、(1c、2c、c'、3c) の *have* 構文があり、お互いに言い換えられると考えられている。

- (1) a. There is {a book/ \*the book} on the mantelpiece.  
       b. {A book/ The book} is on the mantelpiece.  
       c. The mantelpiece has {?a book/ ?the book} on it.
- (2) a. There is {snow/ some snow/ \*the snow} on the roof.  
       b. {?Snow/ Some snow/ The snow} is on the roof.  
       c. The roof has {snow/ some snow/ ?the snow} on it.  
       c'. We have {snow/ some snow/ ?the snow} on the roof.
- (3) a. There is {?a son/ \*my son} in London.  
       b. {?A son/ My son} is in London.  
       c. I have {a son/ \*my son} in London.

しかし、実際は、適・不適格があり、また、完全に同義とはいえない。*there* 構文、*be* 構文については既に松井 (2007) で論じているので、本稿では、*have* 構文の統語的・意味的特徴を考察し、これら三種の存在文の特性を比較したい。お互いの類似性・相違性を指摘しつつ、三構文の存在意義を明らかにしたい。三構文の構造の特質が各々の統語的・意味的特徴に少な

らず反映していることを論じ、there 構文を「中立型存在文」、be 構文を「直接型存在文」、have 構文を「(主語) 関与型存在文」として提案する。その上で、どの構文がどのようなコンテキストで好まれ、効果的なのか語用論的考察を援用する。以下、2 節では、先行研究を概観し、3 節では統語的考察、4 節で意味的考察を行う。それにより、存在文の全体像が浮き彫りにされよう。例文は British National Corpus (BNC) から引用すると同時に、それ以外はすべて三人のインフォーマント\* のチェックを受けた。

## 2. 先行研究

存在文の先行研究としては、Milsark (1974, 1979) を始めとして、there 構文を主に扱った研究が圧倒的に多い。彼は there 挿入分析との関係で be 構文と対比させているように、there 構文と be 構文といった二構文の研究は見られるが、本稿のように三構文を同じまな板に載せて論じた研究はあまりない。中右・西村 (1998) が三構文について論じているので取り上げ検討する。

### 2.1 Milsark (1974, 1979)

there 構文の研究として一番取り上げられる Milsark (1979) によれば、存在文には次の 4 種類がある (1979: 154-5)。

(4) a. 存在論的存在文 (Ontological ES)

There is a God. / There are no ghosts.

b. 場所的存在文 (Locational ES)

There is a fly in the mustard. / There is a robin over there.

c. 迂言的存在文 (Periphrastic ES)

There were many children sick/ playing in the park.

d. 動詞的存在文 (Verbal ES)

There arose many trivial objections during the meeting.

Quirk et al. (1985: 1406) は、(4a) の基底には There is a God (in the Universe). のような何らかの要素があり、省略されているものと解釈している。したがって、(4b) に属するとも考えられる。この点に関しては、後で論じる。

存在文には、通常、述語に場所が明示されている。しかし、存在を表すのに場所だけとは限らない。(5a) のように過程 (process) を、(5b) のように時 (time) を表す場合もある。

(5) a. What if there is a blockage *in the process*? (BNC: H7U)

b. ...you try to estimate how many parents there will be *tomorrow*... (BNC: KRE)

したがって、(4b) の場所的存在文とは限定できない。本稿では、三構文比較の関係上、(4a-b) の存在文を考察する。

## 2.2 中右・西村 (1998)

三構文を主に意味観点から考察している。まず、be 構文には (6a) のような不定名詞句を主語にとる提示型と (6b) のような定名詞句をとる話題型があるとし、提示型は「数量的に限定されたものとして解釈されねばならない」有限主語条件が必要なため (7) が不適格となる。また、「有形の実体を示さなければならない」有形主語条件のため、(8) は非文となる。これは、Bolinger (1977 : 94-5) の説明を採用し、有形とは具象的 (concrete) で視覚によって捉えることが出来るものとしている。

- (6) a. Some snow is on the roof.
- b. The snow is on the roof.
- (7) \*Snow is on the roof.
- (8) a. \*Some space is in the room.
- b. \*An unpleasant smell is still in my car.

それに対し、Milsark (1979 : 220-1) も指摘しているように、there 存在文は、(9) のように、不定数量詞がなくても常に不定の数量が含意されるので、(9) は適格であり、また、be 存在文の有形主語条件は (8) と (10) を比較してわかるように there 存在文にはあてはまらない。Bolinger が指摘しているように、there 存在文は認識領域の存在を表現できるからである。

- (9) a. There is (some) snow on the roof.
- b. There weren't cars in 1987.
- (10) a. There is (some) space in the room.
- b. There is still an unpleasant smell in my car.

中右・西村 (1998 : 68-70) は、(9b) の例を特定のでなく総称的と言っているが、不定数量詞がない時の (9a) は特定のとし、(9b) は総称的とするのは理解し難い。本稿では、これは総称的でも特定の・部分的でもない中間的表現として捉え、不定数量詞がある場合とない場合の意味内容は違うことを示す。

次に、(11a-b) に示す be 構文の適・不適格については、Kimball (1973 : 263) の譲渡不可能な所有 (inalienable possession) 関係を取り上げ、この概念は (12) に示すように it を使った診断により a pain も a sty も譲渡不可能となり、(11) の区別が出来ないので有効でないとしている。しかし、それに対する代案は提示していない。

- (11) a. {A splinter/ \*A pain} is in my arm.
- b. {A sty/ \*Fire} is in his eye.
- (12) a. \*I had a pain in my arm yesterday, but someone else has it now.
- b. \*John had a sty in his eye yesterday, but someone else has it now.

中右・西村 (1998 : 78)

本稿では、「譲渡不可能な所有関係」でなく、「分離可能性」の視点から捉え、(11) が説明できることを示す。

中右・西村(1998: 91-106)は存在の have については Jackendoff (1987) 等のように所有の have の一環として捉えず、経験の have の一環として捉えている。つまり、(13-14) の [ ] に示すように、小節 (small clause) である have 補文を there 存在文に相当するものとして捉えている。その上で、主語 NP と小節補文の間に広義の意味での〈経験〉事象を have は表している。この考えには (13) は当てはまるだろうが、(14) はしっくりしない。

(13) a. Marion had [a child sick (in bed)].

b. Jane<sub>i</sub> had [dirt on her<sub>i</sub> shoes].

(14) a. Jane's arm<sub>i</sub> had [a mole on it<sub>i</sub>].

b. The table<sub>i</sub> has [a pencil on it<sub>i</sub>].

本稿では、例えば、(14a) を [Jane's arm<sub>i</sub> had a mole]、[a mole on it<sub>i</sub>] の二重構造からなると考え、存在 have 構文の have は所有 have の延長線上にある関与 (involvement) の have として捉えたい。経験の have も所有の have の延長線上にあるものと認識される。

### 3. 統語的考察

まず、三構文の構造を論じた後、統語的制約について考える。3.2、3.3の制約は、今までの先行研究でも指摘されているが、なぜなのか充分説明されてきていない。それらは、三構文の構造の反映であることを実証する。

#### 3.1 構造

三構文は、次の (15) で示す [ ] および { } の構造を持つと言ってよい。there 構文と have 構文は小節である補文を内蔵しており、特に、have 構文は、[ ] と { } とが織り成す二重構造になっている。[ ] のない { } だけの一重構造の場合、つまり、have の直後の名詞句までの場合 (We have a book) は所有の意が強い have 構文であって、存在文ではないと言える。つまり、一重構造である (15b) の be 構文、次にそれを小節として内蔵している (15a) の there 構文、さらに二重構造になっている (15c) の have 構文があるといえる。このことは、there 構文を中心にその両端に be 構文、have 構文があると考えられ、各々の構造形体から there 構文は「中立型存在文」、be 構文は「直接型存在文」、have 構文は「(主語) 関与型存在文」として存在するといえよう。これらの名称の適格性は、4の意味的考察でも立証されよう。

(15) a. There is [a book on the desk].

b. [A book is on the desk].

c. {We have [a book]} on the desk].

その決め手になるのが、各々アンダーラインした there であり、be 動詞であり、have 動詞である。したがって、(16) の短縮形の有無が示すように、there 構文の be の短縮形は用いられ易いが、be 構文の be 動詞と have 構文の have 動詞は重要な役割を示すので、短縮形は通常

用いられない。

- (16) a. There's a book on the desk. / There're two books on the desk.  
 b. ?A/The book's on the desk. / ?A/The student's in the room.  
 c. ?We've a book on the desk.

### 3.2 名詞句 (NP) について：限定詞 (Determiner) の有無および定性 (Definite) 制約

ここでの NP は、比較の関係上、there 構文では意味上の主語、be 構文では主語、have 構文では have 直後の目的語をさす。

- (17) (=2) a. There is {snow/ some snow/ \*the snow} on the roof.  
 b. {\*Snow/ Some snow/ The snow} is on the roof.  
 c. The roof has {snow/ some snow/ ?the snow} on it.  
 c'. We have {snow/ some snow/ ?the snow} on the roof.  
 (18) a. There are {students/ some students/ \*the students} in this room.  
 b. {\*Students/ Some students/ The students} are in this room.  
 c. We have {students/ some students/ (?) the students} in this room.

NP に限定詞がない場合、be 構文では (17b, 18b) に示すように、不可算・可算名詞でも不適合となる。なぜなら限定詞のない名詞句は総称的 (generic) な解釈をされ易いため特定を表す述語との衝突が起こるのである。しかし、(9b) の説明で少し触れたように、there 構文・have 構文は限定詞がなくても総称的解釈はされない。「限定詞がなくても部分的 (partitive) 読みをする不定の解釈が与えられる」とよく言われているが、限定詞の有無による読みの相違は明確に指摘されてきていない。

では、there 構文・have 構文で限定詞の有無による (17-18) での snow vs. some snow, students vs. some students の違いは何であろうか。some など限定詞がついている場合は不定数量が述べられているのに対し、限定詞がついていない場合は不定数量も決まっていない。つまり、「屋根に雪がないのではなくある」「部屋に学生が誰もいない (empty) のではなくいる」という意があり、この読みは some などの限定詞がある文にはない。したがって、(9) の説明で、総称的でもなく、特定のでもない中間的表現と述べた所以である。今までの例でもわかるように、there 存在文・have 存在文とも一時性を表すので、総称的表現ではないと言えよう。

be 構文は既知の話題として導入される典型的な構文なので、一般的に定性の the などと共に用いられるが、導入の there を持つ there 構文は聞き手・読み手に新たな情報を導入・提示するという語用論的機能を持っているので、be 構文と異なり、前方照応的 (anaphoric) な定名詞句は、通常はとれない。(最上級や後続の修飾要素により限定される場合などは定名詞句をとる。(例 There's the strangest bird in the cage. There was the smell of orange all over the room.) 一方、have 構文は定名詞句を許容する範囲は (17c, c', 18c) に示すように、there 構文よりも広い。主語は当然ながら、we など人称代名詞を含む定性の NP である。

have 構文は、前述したように「(主語) 関与型存在文」で、目的語が小節の主語となり、重なった関係なので、認識上、there 構文よりも許容範囲が広がるものと推察される。

### 3.3 場所 (Place) など存在を表す構成素の明示

上記の適格文でわかるように、存在文にはふつう述語に場所が明示されている。しかし、存在を表すのに場所だけとは限らない。(19) のように過程 (process) を表す場合もある。

(19) a. What if there is a blockage *in the process*? (=5a)

b. These fish are quite easy to breed if you have a pair *in good condition*.

(BNC: CGH)

いずれにしても存在を表す構成素が明示されない場合、there 構文、have 構文は (20) に示すように適格文だが、be 構文は文構造上非文となる。つまり、there 構文では導入の虚辞 (expletive) *there* のお蔭で have 構文同様、主語・述語が現れるため、文としての構成が可能であるが、be 構文ではそういうわけにはいかない。

(20) a. There is some good news.

b. \*Some good news is.

c. We have some good news.

語用論的には、存在を表す場所などの位置づけは there 構文、have 構文とも背景となっているので、明示されなくてもコンテキストや状況によって暗黙のうちに理解され、(20a, c) のように適格文であるが、be 構文では、不適格になる。つまり、be 構文は (15b) が示す構造のように述語も示す「直接型存在文」なのに述語が欠けているからである。

次の (21)、(22) は場所などが明示されていないが、適格文である。どのような場に使われ、三構文の相違はどこにあるのか検証してみよう。

(21) a. There is a God.

b. A God is.

c. We have a God.

(22) a. There is no fear.

b. No fear is.

c. We have no fear.

(21a, 22a) は経験的な知識に基づいて客観的に述べている。つまり、(21a) は God の存在を話者は否定していない。「神の存在を疑った後で」、「ミラクルが起こることに対して」よく使われる表現である。(22a) も同様に、例えば、「夜に電気がつけてあるとこわくない」とか、「ある状況の下で恐れるものは何もない」という時に使われる。それに対し、(21b, 22b) の通常の解釈は、それぞれ 'Who is the most powerful in the world?', 'What is something you would like to feel?' のような疑問文に対する答であるとインフォーマントは言う。be は存在を表しているのではなく、連結のコピュラである。したがって、(8a) に示したように、本来

は抽象名詞が be 存在文の主語には現れないのに、ここでは現れている。(21c、22c) は、(20c) 同様、存在の have というより、経験の have である。(21c) は「私達は神を信じている」意で、(21a) と異なり、神の存在を疑った後では使われない。(22c) は「私達の人生において恐れるものは何もない」と言っている。このように、どの構文も場所などが明示されていない場合は、特別な存在文で、経験に基づいた表現であると言える。

### 3.4 否定 (Negation)

3.1. の (15) で示した構造が (23) の否定文の解釈に役立つ。

- (23) a. There isn't [a book on the desk].  
 b. [A book isn't on the desk].  
 c. {We don't have [a book] on the desk}.

(23a) は「机の上には本がない」とし、淡々と [a book on the desk] が否定されるのに対し、(23b) は「本が机の上にあるはずなのに実際はない」という意で、[A book is on the desk] が否定される。(23c) は「私達は机の上に本を置かなかった」か「その本はもはや机の上にはない」という意で、本稿で提唱した have 構文の二重構造がこの意味解釈につながっている。

## 4. 意味的考察

4.1、4.2の制約は、3.2と同様、there 構文では意味上の主語、be 構文では主語、have 構文では have 直後の目的語の NP に関する制約で、先行研究でも指摘されているが、なぜなのか充分説明されてきていない。統語的考察でしてきたように、それらは、三構文の構造の反映であることを検証しつつ、4.3の新たな視点を総括として加え、考察する。

### 4.1 具象性 ([Concrete]) : 分離可能性 ([Separable])

具象名詞は book、snow、students のような NP に示されるように、ふつう視覚的 ([Visual]) に捉えられ、各々の構文に用いられるが、抽象名詞は限定詞がついても (24b) のように、be 構文では用いられない。一方、there 構文、have 構文では、具象名詞であろうが、抽象名詞であろうが、限定詞がなくても適格文となることは周知の事実である。その証拠として抽象名詞を表す 'some + 単数名詞' で単純現在 (is, have/has) に限り、つまり、'there is some X in ~', 'some X is in ~', 'have/has some X in ~' を使い存在文の頻度数を BNC で検索すると、(25) の結果が得られる。

- (24) a. There is {truth/ some truth} in this argument.  
 b. {\*Truth/ \*some truth} is in this argument.  
 c. This argument may have {truth/ some truth} in it.

- (25) a. there 構文                      130

b. be 構文	0
c. have 構文	29

視覚領域内の存在を提示する be 構文に対し、there 構文、have 構文とも話者の知覚領域内に新たに生じた情報を与える存在提示の構文であるとするのは、今までの研究でも指摘されている。しかし、なぜなのか、その理由は説明されてきていない。

同様のことが分離可能性についてもいえる。分離可能性は具象性の下位分野と考えることもできる。(23)などは、具象的実体が主題として提示されるが故に簡単に存在の場所と分離可能であるが、(24)では抽象性ゆえに視覚ではとらえられず、分離不可能である。次の(26)はその中間例で分離可能とも不可能ともいえる。痛み(pain)は存在場所から分離不可能であるが、痛みなどは薬などにより時間の経過と共に取り去ることができる。なお、(26)での( )内の数字は、同じ単数NPのa painを使って‘単純現在(is, have/has) + 単純過去(was, had)’におけるBNCでの頻度数を表したものである。(27)の例はKimball(1973:263)によるもので、分離不可能な場合は、be 構文は使えないことが明らかである。

- (26) a. There is a pain in my foot. (1+6=7)  
 b. \*?A pain is in my foot. (0)  
 c. I have a pain in my foot. (3+8=11)
- (27) a. There is {a splinter/ a pain} in my arm.  
 b. {A splinter/ \*A pain} is in my arm.  
 c. I have {a splinter/ a pain} in my arm.

be 構文は直接型あるいは直示型存在文ゆえに視覚領域内の具象的主語・分離可能な主語が要求されるのであろう。一方、小節を内蔵している there 構文、have 構文は、抽象名詞でも認識し易いのかも知れない。

#### 4.2 総称性([Generic]) vs. 一時性([Temporary])

be 構文で‘a + N’が‘A tiger is a dangerous animal.’のように使われると、総称表現となる。このbeは存在を表すbeではなく、連結するだけのbeであることは言うまでもない。しかし、(28b)のbeは存在を表し、主語NPは述語と衝突を起こさず、総称的にも解釈できる。総称的か一時的かは、述語によって決まる。それに対し、there 構文、have 構文のNPは特定・一時的解釈を受ける。(29)に示すように、それらの文末にnowという一時的解釈を示す語を加えることは出来るが、for everは不可能である。

- (28) a. There is a pilot in the cockpit. (BNC: AOH)  
 b. A goalkeeper is in the most visible position of all. (BNC: AHC)  
 c. I have a son in London. (=3c)
- (29) a. There is a pilot in the cockpit now / \*for ever.  
 b. A goalkeeper is in the most visible position of all now / for ever.



- c. I have a son in London now / \*for ever.

#### 4.3 中立的 ([Neutral]) : 直接的 ([Direct]) : 関与的 ([Involved])

(30a、31a) の there 構文は、話者が距離をおいた客観的表現で、存在文としては中立的表現である。be 構文の (30b、31b) は主語と述語とが直線的につながった直接的表現である。それに対し、have 構文の (30c) は (話者がその通りの近くに住んでいるかなどして) 「店が通りの向こう側にある」、または、「通りの向こう側に店があって便利でラッキーと思っている」、(31c) は「話者が何らかの形で地震に巻き込まれている」ことが含意されているように両者とも主語関与型存在文である。

- (30) a. There is a store across the street.  
       b. A store is across the street  
       b'. Across the street is a store.  
       c. We have a store across the street.
- (31) a. There was a big earthquake in Tohoku yesterday.  
       b. A big earthquake was in Tohoku yesterday.  
       c. We had a big earthquake in Tohoku yesterday.

there 構文は、導入の there と (30a) [a store across the street]、(31a) [a big earthquake in Tohoku yesterday] の小節構造が反映した客観的・中立的存在文なのである。情報構造として既知から新へという情報の流れを通常受けるので、新情報を文頭に置くことを避ける機能を there 構文は持っている。従って、(30a) の方が (30b) より好まれる<sup>1</sup>。その証拠に (32) のパターンとそれに合致する例を BNC で調べると右側の ( ) 内の頻度数が得られる。なお、be 構文でも既知情報を文頭にもってくる倒置構文 (30b') の方が (30b) よりも好まれることは言うまでもない。

- (32) a. There is a \_\_\_\_\_ here. (12)  
       b. A \_\_\_\_\_ is here. (0)

いきなり疑問文の形をとると、(33b) は容認度が低くなり、不適格文になるが、a store を wh 語にした疑問文にすると逆に (34b) の方が (34a) よりも好まれると三人の英語のインフォーマントは言う。there 構文には、be 構文と異なり、文脈の話題とまったく関連しない真に新しい話題を導入する機能があるので、(33) の yes-no 疑問文では there 構文が好まれるが、目の前にあるものを指し示す状況が across the street にあり、直接的存在文である be 構文が (34) では好まれるのである。

- (33) a. Is there a store across the street?  
       b. ?Is a store across the street?
- (34) a. What is there across the street?  
       b. What's across the street?

しかし、目の前にないものを意識させ想像させる発話、つまり、直接的でない発話では、(35)に示すように、(34a)の場合と異なり there 構文が好まれる。

(35) A: Well, you can't go to Isle of Wight at that time of day.

*What is there* at Isle of Wight that there isn't here?

B: Palm trees.

A: Oh, there's no palm trees in Isle of Wight. (BNC: KSS)

次に、(36a)と(36b)の相違について見てみよう。一般に(36b)の方が好まれ、(36a)はあまり用いられないが、その根拠はどこにあるのだろうか。

(36) a. {The desk<sub>i</sub> has [a book] on it<sub>i</sub>}. cf. (14b)

b. {We have [a book] on the desk}.

本稿での分析によれば、(36a)は{The desk<sub>i</sub> has a book}と[a book on it<sub>i</sub>]、(36b)は{We have a book}と[a book on the desk]により構成されている。情報構造としては、文末焦点がon the deskに置かれる(36b)の存在文の方がよいことは明らかである。さらに、人間は心理的に人間>動物>生物>無生物という順序で親近感を形成しているので、日常の言語では、一般に親近性のより高いものについて語る方が自然である。したがって、同じ主語関与型存在文としては、(36a)のように情報構造の観点から、また、存在場所の無生物主語の観点からも容認度が低く、ふつう使われない。

ここで、(37c)のように、不定限定詞がつく son や brother など何らかの親族関係を表す場合を考察する。その際、have 構文しか使われないことは、(3)でも示した。それは、主語関与存在文である have 構文の二重構造から簡単に類推できる。従って、その証拠に(37)に合致する存在を表す例を BNC で検索すると右側の( )内の頻度数が得られる。

(37) a. there is/was a son ~. (0)

b. a son is/was ~. (0)

c. have/has/had a son ~. (159)

brother, sister, cousin の場合も have 構文しか使われていない。親族関係の場合は、have の持つ所有・経験の意味的根拠からも、there 構文、be 構文は使われないのである。

friend のような意思伝達などのコミュニケーションがある名詞の場合はどうであろうか。

(38) に合致する例を BNC で検索すると右側の( )内の頻度数が得られる。

(38) a. there is/was a friend ~. (4)

b. a friend is/was ~. (0)

c. have/has/had a friend ~. (117)

この場合も、やはり be 構文は使われない。have 構文は圧倒的に使われるが、there 構文も son などの場合と異なり、使われる場合がある。それでは、there 構文と have 構文とでは、どのような相違があるのだろうか。

(39) a. There is a friend in London.

b. I/ We have a friend in London.

インフォーマントによれば、「(39a) の後には、ふつう、who will call me if he needs help のような節が続き、主に『(同じ考えを持つ) 仲間』という意味で、(39b) の意味とはやや違う」と言う。BNC での一例を見ると、(40) の文脈から類推できるように、there 構文の friend の場合は、インフォーマントの指摘する通りである。

(40) …there were a couple of evacuees with their mothers, there was a German Jewess refugee with her adopted child, *there was a friend who lived with them and helped at a school*… (BNC: A68)

friend が、主語関与型の have 構文では‘親しさ’が加わる「友達」になり、話者が距離をおいた客観的・中立的表現である there 構文では「仲間」になるものと推察できよう。

## 5. おわりに

本稿では三種類の存在文である there 構文、be 構文、have 構文のそれぞれの構造を提示した上で、there 構文を「中立型存在文」、be 構文を「直接型存在文」、have 構文を「(主語) 関与型存在文」として位置づけ、それぞれの統語的・意味的特徴はそれらにより少なからず説明できることを論証した。

\* インフォーマントとして同僚の Peterson 氏、Kritzer 氏、O'Neill 氏に協力していただいた。ここに感謝の意を表したい。

## 脚注

1 (ia) は (30b) のような文よりも容認度が高い。(ia) の be 構文の不定名詞句主語は、聞き手にとって旧情報を表す定名詞句 Sue's thesis を含んでいるからである。

(i) a. Two copies of Sue's thesis are on my desk.

b. There are two copies of Sue's thesis on my desk.

(Huddleston and Pullum (ed.) 2002 : 1397)

## 参考文献

- 荒木一雄・安井稔 (編). 1992. 『現代英文法辞典』東京：三省堂.
- Bolinger, D. L. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum (eds.) 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. 1987. "The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory." *Linguistic Inquiry* 18, 369-411.
- Kimball, J. P. 1973. "The Grammar of Existence." *CLS* 9, 262-270.
- Langacker, R. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. II. Stanford: Stanford University Press.

- 松井 千枝 2007. 「存在を表す there 構文とコピュラ be 構文について」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』 No.37, 111-122.
- Milsark, G.L. 1974, 1979. *Existential Sentences in English*. Ph.D. dissertation, MIT. Reproduced by Garland (1979).
- 中右実・西村義樹 1998. 『構文と事象構造』日英語比較選書 5. 東京：開拓社.
- Rochemont, M. and P. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge : Cambridge University Press.

British National Corpus (BNC)